

聖書：ローマ6：1～4

説教題：罪に対して死んだ私たち

日時：2015年9月6日

パウロはこれまで「信仰による義」に焦点を当てて書いて来ましたが、この6章から「聖化」へと話に移ります。信仰による義は私たち罪人にとって慰めの教理です。自分の罪のために自分を救えない私たちは、イエス・キリストに信頼することによって、ただで救って頂くことができます。キリストの十字架によって罪を赦され、キリストの完全な義の生涯が私に転嫁されて永遠のいのちを受け継ぐ者となることができます。少し前の5章20節にも、慰めに満ちた御言葉が語られました。「律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。」律法に接する時、私たちは自分がいかにひどい罪人であるかを示されて愕然とするかもしれません。それは神が律法を与えた目的の一つです。しかし神はそんな私たちに救い主イエス・キリストも備えてくださいました。その結果、私たちの罪がどんなに大きなものとして示されようと、それにはるかに勝って力強いキリストの恵みによって救われることができるのです。キリストにある救いの恵みは、私たちのどんな罪よりも大きく、力強いのです。

しかしこのような恵みのメッセージを聞くと、一つの問いあるいは反論が出て来ます。それは6章1節にあるように、「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか」というものです。3章7～8節：「でも、私の偽りによって、神の真理がますます明らかにされて神の栄光となるのであれば、なぜ私がお罪人としてさばかれるのでしょうか。善を現わすために、悪をしようではないかと言ってはいけないのでしょうか。」私が罪深ければ罪深いほど、そんな私を救う神の恵みが高らかに示されて、神の栄光に至るのなら、私はもっと罪の中にとどまっても良いのではないか。神の御声に注意を払わず、自分の好き勝手な生活をしてかまわないのではないか。そういう主張です。いわゆる「無律法主義」です。

私たちは一方では「律法主義」を退けなければなりません。すなわち自分の良い行ないによって自分の救いを勝ち取ろうとするあり方です。私たちはただ恵みにより、イエス・キリストを信じる信仰を通して救われます。しかしこのことを知ると、今度は逆の極端に振れてしまう危険があります。すなわち救われるために良い行ないはいらない。それなら神の恵みが現れるためにジャンジャン悪いことをしても良いのではないか。そうして神の恵みが大きく現れるために仕えようではないか！という態度です。ここまで正面切ってはっきり言う人は私たちの間にいないかもしれ

ませんが、そのように考える誘惑が私たちの内にもあるのではないのでしょうか。例えば私たちは聖書の中に神の驚くべき赦しの記事を見ます。ダビデやソロモンや放蕩息子の話を聞き、その罪も赦されるという記事を読みます。そして私たちは神の恵みを賛美し、この私もこの恵み深い神によって赦されると確信します。しかしそれを理解した後、次のような悪魔的な考えが浮かんでくるのです。それならもうしばらく悪を行なっても大丈夫ではないか。こんな罪を犯す人間をも救ってくださるところに神の恵みの素晴らしさが現わされるのだから、少々のはいいのではないか。これが無律法主義です。パウロはこの問題をここで扱っています。1～2節：「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」

まず注目したいのは、2節の「罪に対して死んだ私たち」という言葉です。この「私たち」とは誰のことでしょう。これはクリスチャン全員を指しています。ですからクリスチャンの中には罪に対して死んだ人と、そうでない人とがいるのではない。クリスチャンはみな罪に対して死んだ人です。もし罪に対して死んでいないなら、その人はクリスチャンではないということにもなります。また「死んだ」と過去形で語られています。「これから死ぬ」とか「死につつある」ではない。クリスチャンとは例外なしに、すでに過去に罪に対して死んだ人なのです。私たちはこれを聞いて、本当にそうだろうか。私はまだ罪を犯す生活をしているのに、と思うかもしれません。しかしさらに注目したいのは、誰が死んだと言われているかということです。ここで「罪が死んだ」とは言われていません。そういう意味ではまだ罪が生きていても良いのです。死んだと言われているのは「罪」ではなく、「私たち」です。私たちが「罪に対して死んだ」。これはどういう意味でしょうか。「死」は私たちになじみの深い言葉です。人が死ぬとどうなるでしょう。その人はそれまで生きていた世界との関わりがなくなります。死ぬ直前までは、この世という領域の中で生活し、この世に属していますが、死ぬとこの世界との関わりがなくなります。その領域の外に出ます。その意味でここでも使われています。すなわち罪に対して死ぬというのは、私たちがそれまでの罪が支配する世界とお別れし、そこから抜け出すことです。5章21節に、イエス・キリストを信じる以前の状態のことが「罪が死によって支配する」と表現されていました。生まれながらの、ただ人類の祖アダムと結ばれているだけの状態は、罪が死によって支配しているという状態でした。しかしクリスチャンはイエス・キリストによって、その取り巻く状況が一変した人々です。罪が支配する世界から、別の状態へ移された人々です。そういう意味でそれまでの罪が支配する世界との関係で言えば、それに死んだ人なのです。それとの関わりを断って、二度とそこに戻らない人になった。そして新しい世界、新しい

力のもとに生きる人となった。そういう私たちが罪の支配下にあった時と同じ生活を続けるというのはおかしいことである、矛盾したことであるとパウロは言っているのです。

パウロは一体何を根拠にこんな大それた主張をしているのでしょうか。その根拠が3節以降で述べられています。そこで述べられているのはキリストとの結合です。パウロはここでローマのクリスチャンたちが受けた洗礼の意味を思い起こさせています。洗礼の中心的な意味は、3節に「キリスト・イエスにつくバプテスマ」とありように、キリストと一体の関係に結び合わされることです。ヨハネの福音書15章のぶどうの木と枝のたとえにあるように、イエス様はまことのぶどうの木で、私たちはその枝です。枝である私たちはイエス様に接木されて、いのちある者となります。素晴らしい真理は、ぶどうの木と枝に流れている命は同一であることです。イエス様ご自身の内に流れている満ち満ちた命が、そのまま枝である私たちの内にも流れ込んで来る。ですからキリストについて言えることは、その方と結ばれている私たちにもそのままその通りに言えます。

そこでパウロは言います。3節：「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。」 イエス様の十字架上の死は、私たちの身代わりとしての死でした。イエス様はそこで私たちが払うべき罪の値を代わりに払い、その要求をすべて満たして死んでくださいました。その結果、罪はもうイエス様の上に力も持っていませんし、イエス様は罪の支配と縁を切られました。これはイエス様と結ばれた私たちにも当てはまるのです。私たちはイエス様と結ばれて罪の値を全部支払い終え、精算し終えた者として、罪の支配とお別れしたのです。罪に対して死んだのです。

さらに4節には「キリストと共に葬られた」とあります。葬りの意義は何でしょうか。人はたとえ死んでも、そこに少しでも疑いや生き返る可能性があるなら葬りはしません。つまり葬りは死の確認です。キリストについての告白の中であえて葬りに言及されるのは、キリストの死は確かで、それは本当であったことを示すためです。その葬られたキリストと結ばれた私たちも、キリストと共に葬られたと言えます。このことを述べる意義は何でしょうか。それは私たちがあずかった死は、ちょっと死んだとか、少し死んだというものではないということです。私たちはキリストと結ばれて罪に対して死んだと言っても、そのように考える可能性があります。なるほどキリストとの結合によって私もキリストとともに死んだことにはなる。そのことは受け止めよう。しかし私は罪に対して完全に死んだとはまだ言えない。死

に切ってはいない、と。しかしそうではないのです。私たちは、キリストとともに葬られた者として、完全に死んだのです。決定的に死んだのです。ですから私たちは罪に対して死んだと言われているレベルをあいまいなものに考えてはならないのです。私たちは間違いなく死んだのです。罪が支配する世界体制に決定的にさようならをしたのです。

そしてもう一つ言われていることは、キリストはよみがえったということです。従ってキリストと結ばれている私たちは、キリストが今生きている新しいのちに生かされています。ですから私たちは信仰以前に生きていた世界とはまるで違う生に今、生かされているのです。私たちは以前はアダムとのつながりの中にあるだけであって、それは5章21節で見た通り、罪が死によって支配するという世界でした。しかし今やキリストと結ばれて、それまでの罪の支配に対しては死に、今やキリストにあるよみがえりのいのちの力のもとに生かされているとパウロは言っています。このような自己理解に感謝を持って立つなら、以前と同じ生活を継続することは考えられないし、あり得ないとパウロは言っているのです。私たちの前にあるのは「いのちにあって新しい歩みをする」(4節)ということなのです。

さてこのように見て来ても、私たちの心にはくすぶる思いがあるかもしれません。キリストとの結合によって、今や罪に対して死んだと言われていることを頭では分かる。しかしそれならなぜ私は現実の生活でなお罪を犯すのか。私たちはそう考えて、「罪に対して死んだ」という聖書の真理を否定したり、あるいは良く分からない言葉だと退けてしまう危険性があります。しかし「罪に対して死んだ」とは、もう罪を犯さなくなったとか、完全な者になったという意味ではありません。もしそうであるなら、きよく歩みなさいというような聖書の勧めは一切いらぬはずです。私たちは天国に行くまで完全には達しません。しかしだからと言って、「罪に対して死んだ」という聖書のメッセージを否定したり、割り引いて考えてはならないのです。この真理を受け止めるところにこそ、聖化の歩みの基礎、励まし、力があるからです。

この問題についてある神学者は次のようにたとえを述べています。第2次世界大戦で1945年の終戦一年前、ヨーロッパに大規模な軍隊が一斉に侵入する計画が実行されました。決定的な介入がそこで行なわれました。この日をもって勝負はつきました。全領土における主権は変わったのです。しかしそれでも残存兵による戦いはなおあちこちで残ります。その戦いはなおリアルであり、血を流すものだったでしょう。同じようにキリストの十字架と復活のみわざによって決定的な勝利は確かなものとなりました。この方に結ばれた私たちについても、この方を受け入れた日

以来、その支配権は変わりました。罪が支配する人間ではなくなりました。しかしそれでも救いが完成する最後の日までは残された戦いが継続するのです。

あるいは数年前に訳されたウェストミンスター小教理問答の解説書では、注射のたとえがなされていました。ある人が重大な病気にかかります。その病の力の下にあって、その人はそのままでは死に向かっていた。しかし特効薬を注射した日に支配権は変わったのです。その人の上にあった病の支配権は打ち壊され、その人はいのちの原理に生き始める。しかしそれでも完全な回復まではまだ時間がかかるでしょう。なお様々な痛みも経験するでしょうし、リハビリなどの戦いや努力は必要になるでしょう。しかし世界はすでに以前と違っていますし、勝利は確実なのです。その人は以前と異なる新しい支配に生きているのです。

私たちもそのように、信仰以前の状態と今の自分のキリストにある状態とでは、丸っきり変わっているという聖書のメッセージを良く受け止めたいと思います。以前ある人が、自分はイエス様を信じて信仰告白をしたが、中身は何も変わっていないと証の時に述べていました。私はそれを聞いて、証をする時はイエス様を信じて自分はこのように変わったと話そうとするものだが、この人は自分を立派に見せようとせず、ありのままの自分を正直に語っており、何と謙遜な人であるか、と感銘を受けました。しかし私たちがこのことに同調するあまり、今日の箇所ですべて述べられている真理を否定してはならないのです。イエス・キリストに結ばれている者はみな、罪に対して死んだ者です。自分の生活を振り返ってそう言えるかどうか検討してから納得すべきことではなく、キリストにあってそういう者にされているのだという聖書の宣言を信じ、受け入れることが大切です。私たち自身になお課題はあるけれども、私は今やイエス・キリストと結ばれていることに基づく新しい力の下にある。以前のような罪の力の下にあるのではない。私たちは今朝特に、「罪に対して死んだ私たち」というパウロの言葉を心に留め、神に礼拝をささげたいと思います。ここにまずしっかりと感謝をもって立つことこそ、聖化の歩みの基礎であり、励ましです。そして私たちはキリストにあって備えられた「いのちにあって新しい歩みをする」ことへと焦点を定めて歩みたいのです。